

菖蒲の湯

山田真砂年

澱みより一筋ほどけ花筏
春風やベンチそはそはしてゐたる
春風のほろと転がせ紙コップ
藁屋根に万の雨だれ燕来る
甘き香や産土に降る桜蕊
紅躑躅布袋の頬つぺつやつやと
足裏に温みや八重の花の屑
坂道はくの字に曲がり蝮草
父母のなくて子もなし菖蒲の湯
風吹いて谷の新緑沸騰す
園児らに先生大き新樹光
指たてて仏涼しく座したまふ
母の忌や樗の花を仰ぎたる
きゆきゆと口をゆがめて海酸漿
鳥の糞しらじらと置き齒朶若葉
蛇苺世の裏側を知つてをり
茫々と麦熟れてをり国出づる
緑蔭に犬の嗅ぎゆく文庫本
老鶯の語尾のきらきら細波す
風涼しお不動様の御前に
木洩れ日の波立つごとしあめんぼう
足裏を見せて五月を歩きをる
コンクリに鉄筋あらは梅雨初め
戦艦も紺円盤に草田男忌

夏草や砲台跡の水たまり